

連載〈第2回〉

国際経営学部の展望

中山昭則

Akinori NAKAYAMA

はじめに

国際経営学部は2009年の創設以来、高度なグローバル化社会と情報社会にあって、これら社会で活躍できる人材育成を目標としてきた。具体的には英語を中心とした語学教育と情報学習の徹底化、資格取得支援を行いつつ、知識人としての基礎力の修養、専門知識の習得を重視してきた。卒業生も2回社会に送り出し、彼らは荒波にもまれながらも懸命に努力を重ねているようだ。

しかし、この僅か6年間で大学を取り巻く環境はさらに変化したと言えよう。つまり、地域社会との連携がより重要視され、リベラルアーツの強化も社会から要請されはじめています。こうした新たな使命に対応するため、我が国際経営学部はどのような針路をとるべきであろうか。2014年12月から学科長の重責を拝命した身として学部の展望について述べてみたい。

1. 国際経営学部の今
～本領発揮の時が来た～

別府大学は地域との関わりを常に持ちながら発展してきた。地方にあって文学部単科で存続できたのはその証左といえよう。それは大学自体が独特の“文化”を持ち続けたことに起因すると思われる。地域は本学に対し「純朴な学問の府」というまなざしを向けてきたのだろう。文学・歴史・芸術の領域しか持たない大学はどう見ても「実直に学問を追究している」ことは明らかである。国際経営学部は「その延長上に位置付けられている」ことを肝に銘じなければならない。そして本学が培ってきた独特の文化の上に成り立っていることを改めて確認しておきたい。

上述の通り、今大学は地域連携を強く要請されている。我が国際経営学部は「世界基準（国

際感覚）で地域を見つめる視線」を持つ人材の育成を図っている。つまり軸足は地域にある。自分の住む地域を知る視線を持たずして、どうして世界のことなど理解できようか。本学部では地域と世界の両者を学ぶことができる。そこでしっかりと知識を得ることが出来れば、両者を見つめる眼力と両者の距離感を掴むバランス力を培うことができる。

大分県は「直接世界に繋がる」分野の産業が多い。観光などはその最たるものであろう。対象はいきなり外国人そのものである。彼らを前にしてこちら側の基準で売り込んでも、相手はその気にならなければどうにもならない。つまり、相手国の歴史や文化を知る必要がある。例えば、大分県は温泉が有力な観光資源であるが、世界には“温泉に入る習慣のない人々”は何億人もいる。このギャップをどう埋めるのか？同様に、農業・エネルギー分野も今や「扉の向こうはもう世界」である。さあ、国際経営学部の出番である。

また、それに応える研究者が集まっているのも国際経営学部の強みである。

2. 2018年問題に対処しよう

今全国の大学は所謂『2018年問題』の対応を迫られている。本学もその例外ではあるまい。そして本学部にとってはその矢面に立たされること必定である。残された時間はあと3年しかない。本学部にとって最も現実的な対応策は「地域連携」と考えるが、まだ時間を要するとみている。いや、全教員が地域に飛び出していかなかったら地域連携は永遠にないともっている。幸い進学そして就職の地元志向が高まっている。そして、地域社会も大学との連携に動き始めている。今がチャンスである。

これからは、キリキュラムに「大分の経済」「大分の企業経営」といった講義を設定する必

要性も出てくるかもしれない。教員の専門領域を大分に置き換えていかなければもはや生き残れないだろう。それは“学問の王道”ではないかもしれないが、逆にそれを学問とする知力とバイタリティーを求めたい。地域について、高いレベルの学問体系のもとで実践的に学べる学部にしていかなければならない。加えて、深い教養と慈悲深い人間性の育成も怠っていないことも地域に示さねばならない。

3. 多様性のある学部にしよ う

大学は、本来多様性と自治を誰もが認め合い保証する世界である。こうした空間に入り込むことによって、学生たちは「高校までは見たこともない人々」と巡り合うのである。筆者は地理学科を出ているが、入学の頃は「地理では負けない」と思い込んでいた。しかしそれは程なく衝撃に変わった。何ということはない、全国から「地理だけは負けない」連中が集結していたのだ。「全国には上には上がいるものだ」と呆れ返ったことを記憶している。その腕に覚えのある地理好きたちも、やがて関心事は分散していった。ひたすら山に登る者。地形学に没頭し調査地にアパートを借りた者。古文書と古地図を読みふける者…。地理学という一つの学問領域でさえ様々な興味の対象があるのだ。

柔軟な発想は多様性の受容と議論の積み重ねから生まれると考えている。実はハレー彗星でお馴染みのエドモンド・ハレーはあのアイザック・ニュートンを訪ねている。彼の訪問目的は「惑星が太陽を周回する軌道運動が“楕円”であることを証明するための方策」を議論することであった。そして彼はこの議論において、ニュートンは既にこのことを証明していることを知るのである。恐らくハレーはニュートンとの議論という至福の時を過ごすとともに、彼の多様で柔軟な発想力に舌を巻いたことであろう。

我々も学生たちもニュートンには遠く及ばなくとも、多様性を尊重し合い、議論を重ねていけばきっと素晴らしい学問的成果を上げることができよう。一つの固定観念のみが支配する空間からは“何も生まれない”のかもしれない。

学生諸君、幅広い学問の自由を保証するから、奇想天外なテーマにも果敢に取り組んでほしい。思う存分自由な発想を巡らせてほしい。

資格やライセンスは生きる術として重要な意味を持つが、その所有者の知的好奇心や人間性

を担保するものではない。知的好奇心とそれを支える自立した人間性を持たなければ、「自己の人生を豊かにするために、取得した資格をどう活かすべきか」という問すらイメージできないだろう。単なる“資格ホルダー”になるのなら、そのために費やす時間とエネルギーを他で使うべきだ。

例えば、一日ひとつずつ別府市内にある共同浴場に入った方が、地域の実情を知ることができるだろう。芸術に親しんだ方が“心の持ちよう”を知る人間になれるかもしれない。或いは、トマ・ピケティの本を理解できた方が人として信用度は高まるかもしれない。それは学問の古典でも同じことが言えよう。

4. むすび

私の思いは国際経営学部を「地域について色々なことをやっている」学部にしたのである。39号館の5階には知的好奇心が渦巻いている。学生諸君は教員の研究室に談笑に来るだけでなく「先生はどんな本を読んでいるのだろうか」と探ってほしい。学問の前ではキャリアの差は当然あるが、教員と学生は基本的には対等の立場なのである。

そして、地域は今様々な問題を抱えている。その中で本学部が対処できるメニューを広く地域社会に提示しながら、新しいメニューの開拓にも努めなければならない。地域連携推進センターおよび他学部との連携を強化して別府大学の伝統を守り、さらに発展させていきたい。